

蒲原津から新潟津へ

高野山清浄心院の「越後過去名簿」(過去帳・供養帳)によれば、戦国時代の永正17(1520)年に「新方」の人が供養を依頼したという記載がある。これが現在、新潟という地名が出てくる最も古い例である。新潟津は、蒲原津・沼垂湊と合わせて、当時「三ヶ津」と呼ばれた。越後の戦国大名上杉謙信は、三ヶ津に配下の代官を置いた。

永禄7(1564)年には、京都醍醐寺の僧が「ニイカタ」の旅籠に逗留し、蒲原各地を回った。また永禄9年の仏像の墨書銘(記録)には「平島郷新潟津」とあり、平島付近(西区)にあったと考えられる。新潟津が現れると蒲原津は次第に衰え、新潟津は次第に主要な湊の役割を果たすようになっていった。

新潟津と越後統一

天正9(1581)年、阿賀北の武将、新発田重家が新潟津で入港税の押領行為を働き、上杉景勝(上杉謙信の後継者)との抗争が始まった。新発田氏は織田信長と同盟を結び、反旗を翻して上杉景勝を追い詰めた。

同10年7月新発田方は白山島(中央区)に城を築き新潟の町民を人質にとって新潟津を占拠した。それに対して上杉方は木場城(西区)を造り、「寄居」(城塞)を築いて新潟津を攻めたが、容易に攻略出来なかった。

天正14年、新発田方に味方していた新潟・沼垂の町民たちが上杉方へ寝返り、上杉方は新潟・沼垂を制圧することができた。新潟津を失った新発田氏は翌15年に滅ぼされ、越後国は上杉景勝によって統一された。



新発田重家の乱関係図(『絵図が語るみたと新潟』より転載)

祈りと生活

戦乱や災害の中で、多くの悲しみが生まれた。人々は神仏に祈り、極楽浄土への往生に救いを求めた。霊地には經典などが埋められた。西蒲区竹野町の菖蒲塚古墳経塚には、平安時代末から戦国時代にかけて、經典や鏡・仏具が埋められた。

薬師如来は衆生の病苦を救うとされた。東区松崎薬師庵に伝わる木造薬師如来坐像は、櫛の一木造で平安後期の作といわれる。地蔵菩薩は六道を巡って地獄から人々を救うとされた。秋葉区小須戸の曹洞宗茂林寺に伝わる木造地蔵菩薩半跏像は、檜の寄木造で南北朝期の作といわれ、広く庶民の信仰を集めた。

鎌倉・南北朝期には新しい仏教が浸透した。市域とその周辺には中央区鳥屋野西方寺の逆ダケの藪をはじめとして、越後に配流された親鸞にまつわる多くの不思議な自然現象が伝えられている。中央区長嶺町の蒲原神社に伝わる木造伝島山重宗夫妻坐像は、大仏師運慶の流れを汲む尾張法眼湛賀が建武元(1334)年に造立したものである。その胎内墨書銘からは、珍しい数の時宗(踊り念仏)結縁者の存在がうかがえる。

西蒲区石瀬の種月寺は、曹洞宗が最初に開いた越後四箇道場の一つで、室町時代の名僧南英謙宗に皈依する信者は他国にまで及んだ。

みなとまちの繁栄を祈る信仰の象徴もある。中央区沼垂

東法光院の絹本着色不動明王二童子像は鎌倉後期の作とされ、三尊が波打つ岩上に描かれ「荒波鎮めの不動」の名で信仰を集めてきた。同じく絹本着色三千仏図は室町時代の三幅仕立て、富める有徳の信者が両親の供養として寄進したものである。



經典を収めた菖蒲塚古墳経塚出土の経筒
金仙寺所蔵(新潟市歴史博物館寄託、国重要文化財)



木造伝島山重宗夫妻坐像 渡辺康文氏撮影
蒲原神社所蔵(県指定文化財)